●センターを運営する学生スタッフの育成

大学ボランティアセンターの運営形態は大学によって様々ですが、本学のボランティア・NPO活動センターでは、教育職員・事務職員・学生スタッフの3者が協働して運営しています。中でも、学生スタッフは「ピアサポート」という観点から、本学学生のボランティア活動を応援する重要な役割を担っています。

ボランティア相談をはじめとする日常的なコーディネート業務、チラシ整理やメールマガジンなどの情報提供、ボランティア活動を始めるきっかけとなる様々な企画など、学生スタッフが取り組んでいることは多岐に渡り、そのためには幅広い知識や経験が必要となってきます。

このことから、ボランティア・NPO活動センターでは、ボランティア活動を推進していくために社会課題に対する意識を持ち、社会に働きかけていく力をもった学生スタッフの育成を図るとともに、組織運営力、コーディネート力をつけることなどを目的として、学生スタッフへさまざまな研修の機会を提供しています。

企画名　タイトル	2010年度オリエンテーション合宿
報告者名	片岡　華絵　(文学部　史学科　2年次生)
日　　時	2010年5月29日（土）12時45分～5月30日（日）15時30分
場　　所	龍谷大学セミナーハウス　ともいき荘
実施主体	ボランティア・NPO活動センター
来場者人数	学生スタッフ61人（深草17人・瀬田44人)、職員7人　計68人

■経緯・目的

瀬田・深草の学生スタッフ6名とコーディネーター2名の計8名が実行委員となり、合宿を計画しました。

話し合いの中で、今年度のオリエンテーション合宿の目的を『ボラセンの理解』としました。この目的を達成するために、新学生スタッフと昨年度から継続して活動している学生スタッフに分けて合宿の目標を以下のとおりに設定しました。

- 新スタッフ：
  上回生からボラセンへの想いを1つ聞く。
- 昨年度から継続の上回生スタッフ：
  新入生にボラセンへの想いを一つ伝える。

これらを目標とすることでボラセンの良さや必要性を再認識できるようにしました。

■概　　要

実行委員で当日までに10回会議を開き、細部まで打ち合わせを行いました。各プログラムごとに担当を数名決めて、小会議を行い、それを実行委員会で共有・意見交換という形で円滑な会議進行ができるように心がけました。さらに、合宿1日目の夜に2日目に向けた打ち合わせも行いました。

【1日目】

①古川センター長の挨拶
②アイスブレイク
③セミナー「ボラセンの理解」
　講師：筒井副センター長
④センターの企画紹介
⑤交流会

【2日目】
⑥朝の集い
⑦ワーク
- コーディネートに対する不安や疑問を解消する為のワーク
- コーディネート体験のワーク
- まとめ

⑧合宿振り返り

■参加者の声・得られた効果など
- 瀬田・深草両キャンパスの企画の現状を知ることができた。
- 学生スタッフ同士がお互いのボラセンに対する想いを聞いて頑張ろうと思った。
- みんなが一体になれた気がした。
- みんなの意見を聞くことでとても感動した。
- 自分の想いを伝えるのは大事。
- これから学生スタッフとして一番重要なことだと私は思っているので、今後の自分のコーディネートに役立てられることを見つけようと思った。
- 私たち学生スタッフのメインの仕事であるコーディネートについて、上手くなりたいという気持ちが大きくなった。実際に良い練習になった。

以上より、新学生スタッフはこれからセンターの学生スタッフとして活動していくという自覚が芽生え、昨年度から継続して活動している学生スタッフは、改めて自身を振り返ることができたのではないでしょうか。そして、センター全体のモチベーションアップにつなげることができたのではないかと思います。

■学んだこと・今後の課題
- 実行委員長を置き、各ワークの進行状況を把握するべきであった。
- 実行委員同士の情報共有が上手くできなかった。
- 特に分担のない実行委員が当日臨機応変に動くことができなかった。
- 企画紹介において、センター委員会、ボラセン会議で承認されて初めて企画が成立するということを知る機会にすべきであった。
- 合宿直前にも会議をし、合宿当日に備えるべきであった。

企画名　タイトル	深草国内研修（夏合宿2010）
報告者名	片岡　華絵（文学部　史学科　2年次生）
日　　時	2010年9月8日（水）13時45分　～9月10日10時30分　2泊3日
場　　所	龍谷大学セミナーハウスともいき荘
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）
参加人数	18人（学生16人　職員2人）

■経緯・目的

まとまった時間を取ることのできる長期休みを利用し、今年度の2点の目標である『1人1個はボラセンの魅力を語れるようになる』『班活動を軌道にのせる』が前期において達成できていたかについてふりかえり、反省と後期に向けた課題の確認を個人と学生スタッフ全体に分けて行いました。

また、班活動や現在の企画、学生スタッフ間の情報共有を行うことで、更なる信頼関係を築き、スタッフ間の結束を強める事により互いを刺激しあい、より活発な活動をするセンターにすることを目標にしています。

■概　　要

【1日目】
14：00～14：10　開会
14：10～17：40　前期ふりかえり・後期目標
①アイスブレイク
②後期スケジュール表配布、後期企画概要説明（ラビラビ）
③前期ふりかえり（班）
④前期ふりかえり（個人）
※③・④では、前期の活動、自分が頑張っ

たと思うところの２点をシートに記入し、グループごとに共有し、話し合いました。その際に他のスタッフに自分の評価をしてもらって、自分だけでは発見できないであろう側面を見つけることができるようにしました。
この前期ふりかえりから自分の課題を見つけ、後期に向けて目標をつくりました。

⑤コーディネーターの話

17：40～18：00　チェックイン
18：00～20：00　夕飯・シャワー
20：00～22：00　交流会
23：00　消灯

【２日目】

７：00～８：00　朝の集い（御所で体操）
８：00～９：00　朝ごはん
９：00～12：15　ボランティア紹介ワーク

①ボランティア紹介ワークとシートの説明
自分の経験を人に伝えるためにシートを記入しグループごとに共有しました。

②グループごとにボランティア紹介
グループでメンバーが経験したボランティアのうち1つを全体発表用に選びます。

③グループごとに発表する活動のチラシ作り
ボランティアの魅力などを経験したスタッフから引き出しそれを他のスタッフ伝えるために全員に向けて発表をしました。

④全体発表

プログラムのねらい

自分たちが経験したことをわかりやすく伝え、経験者の声をもとに情報をまとめ、伝えることによってスタッフ間の理解を深め、またコーディネートに役立てることです。

12：15～13：15　昼食
13：15～17：45　企画立案ワーク

①アイスブレイク
②企画ができるまで（去年実施企画から）
③企画を作ってみよう

プログラムのねらい

企画立案に対するハードルを低くするために、企画が出来るまでの過程を説明し、実際に企画を立案してみることで企画の楽しさを体験してもらうことを狙いとしています。

企画書とプレゼン資料の2点を作成し、より実践形式に近いものにしました。これをグループごとに行い、発表・評価を行いました。

17：45～18：00　休憩
18：00～19：30　夕食
19：30～20：30　企画プレゼン大会
23：00　消灯

【３日目】

８：00～９：30　朝食
９：30～10：30　ふりかえり
10：30　解散

■参加者の声・得られた効果など

【参加者の声】

- 後期の活動予定表があったのは良かった。
- みんなで１つの事を決めるのは楽しいと改めて実感した。
- 後期に入る前にみんなに会ってボラセンに対する意識を高めたり、交流を深めたりすることができてよかった。
- 企画の立て方がわからず、イメージがぼんやりとしていたけれど、このプログラムを通じてある程度つかむことが出来た。
- 以前よりもボラセンのことが分かった。
- 自分後考えていることや、ほかのスタッフが考えていることを聞けてよかった。
- ボラセンって楽しいと思えた。

【得られた効果】

前期振り返り・後期目標を夏期に行うことによって、「ボラセンに対する意識が高まった」「企画の立て方や面白みを感じることができた」というような声が得られたので、夏合宿の目的は達成で来たのではないかと考えています。

■学んだこと・今後の課題

【得た学び】※参加者の声より抜粋

- 前期振り返り後期スケジュールでは今までやってきたことに対して皆で話し合う良い機会だったと思っています。他の班からの客観的な意見も参考になった。
- ボランティア紹介も自分がやってきたことを皆に知ってもらえただけでなく他の人がどんなことをしてきたのか知ることができて良かった。
- 友達の重要さを改めて知った。お互いに助け合い、励ましあいながら取り組んだ。
- ワークをつくる過程の中で、ボラセン現状を知ることができた。また、職員さんから、さまざまなアイディアをもらい、勉強になった。
- お互いのスケジュールを把握する必要があると実感した。
- 当日、はさみなどの小道具類を忘れてしまったが、必要な場面が多くなるので、次回からは持参できるようにしたい。
- 企画をたてるにあたってどの様な内容にするか、何を意識してそれをしてほしいかなどの企画の作り方。
- 自分がたてた企画の主旨を巧く説明出来なかったこと。

【反省点】

- やはり夏休みでの活動だったので他の活動とかぶることが多く中途半端な関わり方になってしまったと思う。企画面でもあまり関われず皆の負担が増えてしまい申し訳なく感じる。しかし、合宿自体は自分の興味感心を深めてくれ、とても有意義なものだった。今後このような企画があるならキッチリやっていきたい。
- ワークは一回通しで流しとくほうがいい。やってみないと気づかないことがあるのでリハーサルをするべきだった。どこまで共有してほしいのか/したらいいのかわからなかった。作業の分担が早かった。各プログラムのねらいまではみんなで決めれば、共有しやすくなる。
- お金の管理は担当者を事前に決める必要があった。大事なとこなので、表や集金袋を作るなども必要。合宿後にどうつなげるかをしっかり決める。合宿終わってからも継続的にいかしてもらうなら、事前にもうちょっと固めとく必要があった。
- 話を詰める時期が少し遅いと感じた。夏休みはお互いが忙しかったので、夏休み前までに具体的な内容について話しておくべきだった。
- ボランティア紹介シートと企画立案ワークのファイルを作り、合宿参加していない人も共有することができ、合宿で取り組んだことをやりっ放しにしておらず、素晴らしいと思った。
- 何を意図してそれをしたのかを理解させられなかったことや情報共有がコア内で巧くできていなかったこと。

企画名　タイトル	瀬田国内研修（団体訪問～報告会～日帰り合宿）
報告者名	谷川　大樹（理工学部　環境ソリューション工学科　２年次生） 細谷　勇介（社会学部　コミュニティマネジメント学科　２年次生） 高田　靖人（社会学部　社会学科　３年次生）
日時／場所	2010年９月８日（水）９時30分～17時00分 ／瀬田キャンパス6号館　第1グループワーク実習室 2010年９月13日（月）10時00分～17時00分／セミナーハウス　ともいき荘
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数	学生スタッフ42人（職員２名）

■経緯・目的

これまでの国内研修と違い、他の地方に研修しに行くのではなく「大学のある瀬田地域のことをもっと知りたい！」という思いから、以下の内容になりました。

- 瀬田地域のボランティア情報が少ないため、瀬田近辺の団体を訪問し、収集したボランティア情報を日常のコーディネートに活かす。
- 情報収集した団体の紹介を学内行事などで行い、ボランティア活動などに参加することが地域課題の解決に少しでもつながることを本学学生に知ってもらう。
- 前期の振り返りと後期の活動計画をたて、全体のモチベーションアップを図り、今後のセンターの活動に活かす。

■概　　要

①団体訪問（８月中）

５つの班に分かれて事前に選んだ団体を訪問。設立の経緯、活動の紹介などについての説明を受け、団体によってはその活動にも参加。

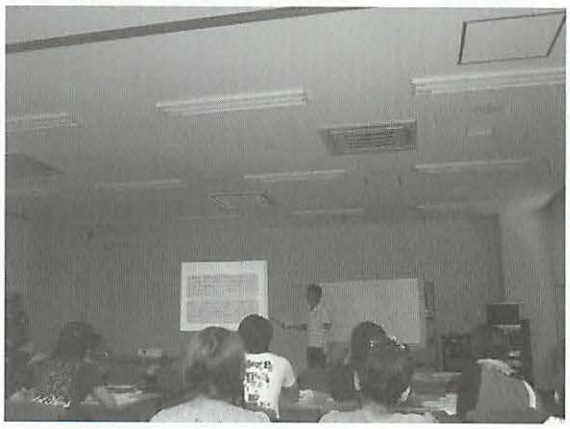
訪問団体

８月５日（木）・20日（金）：　風の子保育園

12日（木）：　瀬田川リバプレ隊
24日（火）：　鳰の湖音楽集団
25日（水）：　大津環境フォーラム
31日（水）：　まちかどプロジェクト

②団体訪問報告会（９月８日）

- 各班がパワーポイントを使って団体訪問の内容を発表し、班ごとに振りかえりと感想を出し合い、全体で共有。
- コーディネート研修（別頁参照）欠席者のために内容の伝達を行った後、今回の訪問団体のボランティア情報を使った２人１組の模擬コーディネートを実施。



③日帰り合宿（９月13日）

- 前期の振り返り

ボランティアコーディネート

ふりかえりシートに記入した内容を各自が班の中で出し合った後、班ごとに出た意見を発表し、全体で共有。

企画

前期に実施した企画について、「反省点」「コアメンバー以外の動き」「次に向けて」の３点から発表。

- 後期活動計画と個人目標の作成

企画

後期実施予定企画の進捗状況を発表し、全体で共有。

班活動

後期スケジュール表の作成と、２回生を中心とした後期の動きの明確化。

■参加者の声・得られた効果など

- 報告会を通して、様々な分野の情報を得ることができてとても勉強になった。
- 団体の活動内容を知るだけでなく、設立の経緯なども知れたことで、来客者のニーズによりあったボランティアを紹介できると思った。今回学んだことをしっかりコーディネートという形で還元していかなければならないと感じた。
- 模擬コーディネートで今回学んだボランティア団体の紹介の練習ができ、日常のコーディネートでも実践できる自信が湧いた。
- まだボランティアコーディネートに不慣れなせいか、来室した学生と１対１で対応することに苦手意識をもっているので、後期からはもっと経験値を増やして挑みたい。

■学んだこと・今後の課題

国内研修は参加者みんなで行うものだと考えていることから、みんなの意見を聞き、それを元に進めていきましたが、形にしていく中で様々な点について検討する必要があり、直前までバタバタしてしまいました。無事成功させることができたのは良かったのですが、夏休みを使って打ち合わせをすることが出来ず、職員さんからのアドバイス任せになってしまった点があったのが反省どころです。

また、団体訪問の報告から、瀬田地域にどのようなボランティア団体があり、どのような背景があって団体設立に至ったのかがわかりました。そして、ほとんどの団体が学生ボランティアを求めていることがわかったので、これからもそのような団体と関係を持ち、ボランティア紹介を行っていきたいと考えています。それを形にするための一歩として、団体訪問した班ごとに団体の情報を載せた展示物を作り、龍谷祭で展示します。（谷川）

今回の国内研修では、瀬田地域にどのようなボランティア団体があり、どういった背景があって団体の設立に至ったのかなど深い部分まで理解することができました。今後の課題として、今回収集できた情報を、学生スタッフが個々で把握し、来室者に的確に情報伝達を行えるように高い意識を持って、日常のコーディネートに取り組んでいけるように策を講じていきたいです。

また、他の企画との兼ね合いなどもあり、コアメンバー全員が揃ってのミーティングがあまりなく、メンバー間での情報共有ができていなかった部分がありました。もっと1回1回のミーティングを大切に行って、時間を有効活用し、確実に情報把握できるようにするべきであったことが私自身の反省点であると思います。来年は、今回の反省点をうまく改善して取り組んでもらえるよう、引き継いでいきたいと思っています。（細谷）

コーディネート・企画・班活動などといったセンターでの活動を、１、２回生中心で運営できるような組織作りをすることに向け、３回生は今までのコーディネートや企画・運営面での自分の知識や経験をできる限り後輩に伝えていかなければならないと思います。（高田）

企画名　タイトル	ボランティアコーディネート研修
報告者名	平形　駿（経済学部　現代経済学科　3年次）
日　　時	2010年9月2日（木）13時00分～16時00分
場　　所	深草キャンパス　21号館402教室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）
来場者数	29人（深草13人　瀬田16人）

■経緯・目的

ボランティアセンターではボランティアコーディネートが重要な役割の一つです。コーディネートの技術を向上させ、コーディネートにやりがいや楽しさをみつけてもらうために模擬コーディネートを行ってきました。しかし、模擬コーディネートでは少人数で行うために様々な意見を聞くことができないこと、同じセンターのスタッフだけで行うので出てくる意見が似ていることが問題になっていました。

また、学生スタッフにアンケートを採ったところ、以下二点の問題が浮かび上がりました。一点目は、センターにあるボランティア情報をうまく活用できず、紹介する情報が偏ったり、情報不足が生じるという問題です。二点目は、コーディネート中に話が途切れる、来客者の要望に対して臨機応変に対応できない問題です。

以上の問題点を改善するために外部の講師を招き、瀬田と深草の学生スタッフが合同で研修を行うことを決めました。

■概　　要

講　師：南　多恵子

　　夙川学院短期大学　児童教育学科　講師

①アイスブレイク「うそつき自己紹介」

レクチャー・ワークに入る前に参加者の緊張をほぐすため、アイスブレイクを行いました。司会者が「うそ」と「真実」のエピソードを語り、どちらが「うそ」なのかを当てます。司会者が話している時の口調や表情をよく観察し、さらに効果的な質問をすることで「うそ」を見破ります。レクチャー・ワークに先駆けて傾聴力、質問力の大切さを確かめる内容にしました。

②レクチャー

質問には「閉ざされた質問」と「開かれた質問」があります。「閉ざされた質問」とは「はい」「いいえ」「単語」で答えられる質問で、「開かれた質問」とは具体例や感情など応答内容を相手に委ねる質問です。「閉ざされた質問」ばかりしていると相手にストレスを与えてしまい、「開かれた質問」ばかり対話にテンポがなくなって時間がかかってしまうことがあります。「閉ざされた質問」で対話のテンポを上げながら、「開かれた質問」で相手に自由な発言をしてもらうなど、二つの質問をバランスよく使い分けることが大切です。

また、ことば以外のものでメッセージを伝える「非言語的コミュニケーション」にも気を使う必要があります。身振り、手振り、体格、風格、服装、話のスピード、会話の際の距離などの非言語的コミュニケーションは言語的コミュニケーションと同様に重要です。

レクチャーでは以上のことをビデオの視聴やワークシートへの書き込みなどをして勉強しました。

③ワーク

レクチャーで教わったことの実技練習として模擬コーディネートをしました。二人一組になり、来客者役とコーディネーター役に分かれ、それぞれ一回ずつ模擬コーディネートしました。挨拶から良い雰囲気をつくり、うまく質問することで相手の話をよく聞き、自分なりの表現で言いたい事をうまく伝えるように努力しました。

■参加者の声・得られた効果など

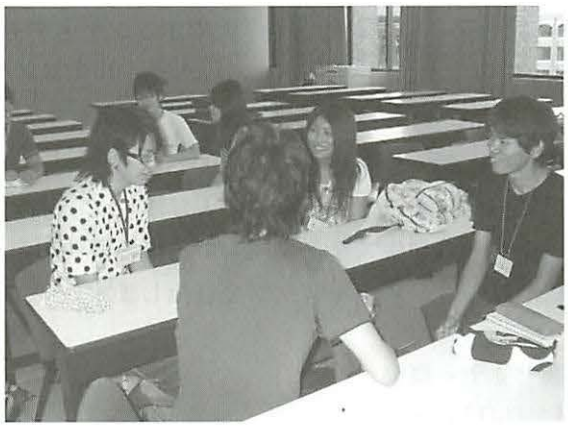
「自分では気付けないところをワークしているときに相手にアドバイスしてもらえたので良かった。」「模擬コーディネートを通して深草のスタッフと交流出来て、自分のコーディネートのマイナス点の指摘をしてもらえた。誉めてもらえたのもうれしかった。勉強になりました。」など、自分のコーディネートに対して今までとは違う指摘をしてもらえたという感想が多かったです。ワークの際に瀬田と深草の学生スタッフが二人一組になり、普段あまり話したこともないような人と組むことで新しい意見をもらうことができたのではないかと思いました。

「人に何かを伝えるときは、自分の個性を活かし、自分の言葉、自分の表現で伝えることが大切だということを知った。」「コーディネート中は閉ざされた質問ばかりしてしまいがちだけど、もっと開かれた質問を取り入れて、相談しにきた学生がもう一度気軽にきたいと思ってもらえるようにしたい。」など、来客者対応の仕方を今後どのようにすればいいかを明確にしていた学生スタッフも多かったです。コーディネートに対してのモチベーションが上がり、各スタッフが今までとは違うコーディネートをするきっかけになったのではないかと思います。

■学んだこと・今後の課題

この研修を通して、各スタッフが今までのコーディネートの良い点と悪い点を見極め、具体的にどのようなコーディネートをすればよいかを考えるきっかけになったと思います。それぞれの思いを忘れないように、各スタッフのコーディネートに対する目標を定め、それを確実にこなすためのコーディネート環境づくりをしていくつもりです。

なお、今回の研修ではボランティアの情報不足という問題についてはあまり触れなかったので、改めてコーディネート班で改善策を考えるつもりです。



○外部団体主催の研修会参加

外部団体が主催する研修会やセミナーに学生スタッフが参加し、そこでの学びをボランティア・NPO活動センターに持ち帰り、組織の運営や企画、ボランティアコーディネートに役立てます。

セミナー名	大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2010 ボラセン・エアポート2010 ～飛び立つのはアナタ～
日　　時	2010年9月6日（月）～2010年9月7日（火）
場　　所	京都府立ゼミナールハウス
主催団体	大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2010実行委員会 ・京都文教ボランティアセンター　学生スタッフ ・立命館大学ボランティアセンター　学生コーディネーター ・龍谷大学ボランティア・NPO活動センター　学生スタッフ ・特定非営利活動法人ユースビジョン 大学ボランティアセンターリソースセンター
全体参加人数	大学ボランティアセンターで活動している学生スタッフ　　合計56名 （13大学・15キャンパス、企画運営スタッフ8名含む）

■目　　的

このセミナーでは、全国の大学ボランティアセンターの学生スタッフ同士で、悩み解決の糸口を見つけ、スキルアップを目指します。

■セミナー概要

【1日目】

1．開会式・オリエンテーション・アイスブレイク
2．全体会・ワーク
　①「あなたにとってボランティアって何？」
　②「あなたにとってボランティアセンターって何？」
　③「あなたにとって学生スタッフとは何？」
　④「何で今も学生スタッフを続けているの？」
3．分科会
　①コーディネーション「You・コーディネーション＼（^o^）／コーディネーションの基本を悟り、「嫌い」から「好き」への大革命！」
　②企画「振り返りが変わる。振り返りで変わる。」
　③広報「自分なりのbefore-after」
　④運営「“行かなきゃいけない”ボラセンから“行きたいボラセン”へ…」
4．交流会

【2日目】

1．朝のワーク
2．各キャンパスでアクションプランを作成
3．アクションプラン発表
4．振り返り

■センターからの参加者と感想

【企画運営スタッフ】計4名参加

高田　靖人（社会学部　社会学科3年次生）

今回のセミナーを通して一つの言葉の意味を考えました。それは、本セミナーの事務局NPO法人ユースビジョンの団体名となっているyouth visionという言葉です。youthそれは私たちの世代のこと。そしてvisionこれは若者が将来の自分自身、また将来のボランティアセンターがどうなっているのか？というvisionを持つことが大切だと思いました。私は、自己満足で終わるのではなく、自己満足が人を喜ばす、人に喜んでもらう、そんな人間になりたい！というvisionをもって日々生活したいと思いました。

田中　大樹（文学部　史学科３年次生）

今年は、自分の中で「伝える」ということをテーマにして、参加させてもらいました。それは、僕が約２年半活動してきてわかった気づきや、去年実行委員としてやってきた経験を伝え、参加者の方が今後のボラセンの活動に生かしてもらい、なおかつ、次に実行委員をしたいという思いを持つ学生を一人でも増やしたいという思いから来ました。この思いがどれくらい達成できたのかわかりませんが、自分の経験を伝える中で、改めて自分の所属しているボラセンの良さに気付くことができました。また、ボランティア、ボラセンの存在を自分の中で問い直す場にもなり、ボランティアやボラセンの存在意義などの答えを自分で導き出せ、モチベーションがアップしました。

玉置 友圭子（国際文化学部 国際文化学科２年次生）

このセミナーが完成するにはおよそ３か月の期間がかかりました。何度も何度もミーティングを繰り返し、みんなで一つのものを作り上げるのはとても大変でした。普段の仲間とは違う初対面の学生と話し合い作業をするのもとても新鮮で、改めて自分の意見を述べることの大切さとむずかしさを感じました。去年は参加者としてこのセミナーに参加していたのですが、実行委員としての参加は去年の何倍も私を成長さしてくれたと思います。だからこそ来年のセミナーをつくるであろう次の世代の人達にも、興味があるならば、是非実行委員として参加してほしいと思います。

歌藤　智弥（国際文化学部　国際文化学科２年次生）

岩手から広島まで、全国の大学ボランティアセンターまたはボランティアセンターを設立しようとしている学生が集まり、それぞれ全く違った形態を持つボラセンに所属しながらも、互いにボランティア観や学生スタッフとは何なのかなど、普段話し合う機会がないような事を真剣に話し合う事ができました。多くの人の考えに触れ、共感や驚き、学びなどを得ながら誰もが楽しみ、学べる場であったと感じました。セミナーを運営する側は、参加者とはまた違った事を学べるし、やってよかったと心から思っています。確実に今後の活動に生かせることでしょう。

【参加者】深草キャンパス　計２名参加

池上　慎平（法学部　法律学科２年次生）

各大学によって学生スタッフの活動の仕方や関わり方、置かれている環境や問題点などは様々でした。そんな中でも共通の悩みを発見したり、お互いの工夫や思いを話し合ったことは今後自分がセンターで活動していく上で大きな励みにもなり、また問題解決の糸口となるなど、たいへん収穫のあるセミナーでした。今後、このセミナーで感じたこと・思ったこと・学んだことを自分のセンターで共有し、龍大ボラセンの活動がより良いものとなるようにしたいです。また、今回のセミナーのように他大学の学生スタッフがうまく関係をとれるような場をつくっていきたいです。

板野　裕子（文学部　史学科１年次生）

全体的に進め方をみて、企画やミーティングの新たなやり方が発見できました。アイスブレイクを今までよりも重要だと思うことができ、その組み合わせ次第で驚くほど効率が上がることを実感しました。また、分科会が一番多様な学びがありました。何となく変えたいと思っていたことが、話し合ううちに根本的な問題にたどり着く過程は目を見張りました。ミーティングが変わればボラセンが変わるという言葉も、約３時間の講座を通して深く納得することができました。今回、簡潔に一言学んだといえることは、龍大ボラセンと他大学のボラセンの違いです。議事録ひとつをとっても、メーリングリスト、ブログ、手書きと違う方法がとられている事を知り、どこも試行錯誤しながら理想を目指している事を改めて感じました。まだ始動したばかりというボラセンもあり、自由に活動できる基盤が出来上がっていることは確かに恵まれているかもしれないと思います。そのことに

気づけたのが、私にとっては何よりの収穫でした。

【参加者】瀬田キャンパス　計４名参加

谷川 大樹（理工学部 環境ソリューション工学科２年次生）

企画の分科会では、振り返りの前に振り返りをする重要性を確認する必要や、よりよい振り返りの方法などボラセンで活かせそうなことをたくさん学びました。また、各大学のボランティアセンターによって学生スタッフの役割が違いました。職員がいなくてすべて学生スタッフのみで行うボラセンや、コーディネートはすべて職員に任せているボラセンなど、全国には様々なボランティアセンターがあるということを学びました。いろいろなボラセンの人の話を聞くと、いかに自分が恵まれた環境で学生スタッフをさせてもらえているのか改めて実感できました。

笹渕 賢人（理工学部 環境ソリューション工学科２年次生）

今までボランティアセンターと言えば龍谷大学での活動しか考えたことがありませんでしたが、今回全国のボラセン学生スタッフと交流することで、多くの発見や学びがあり、視野を広げるとともに、これからのセンターの活動を見直すとてもいい機会となりました。自分が今まで以下に小さな範囲で活動していたかも知ることができました。様々なワーク、特に分科会では直接これからの活動にかかわることを学べたので、早速活かしていきたいと思います。

せっかくなんだから楽しくないと！は活動の中でも常々思っていることなので、このセミナーは理想のボラセンの形でもありました。

山本　美帆（国際文化学部　国際文化学科１年次生）

私は瀬田からの他の参加者に比べて、ボラセンに対する熱い思いっていうのが少ない方だと感じていました。今回は、他大学のボラセン学生スタッフとの交流というより、私自身は他ボラセンについて知って、改めて瀬田ボラセンのことを考えるということに結果的になったと思います。自分のボラセンでの立ち位置を改めて考え、ボラセンでちゃんと取り組もうという意識が出てきたのが何より収穫だと感じています。具体的に何を学んだ、何が良かったということでなく、参加して良かったと思っています。

吉田　裕貴（国際文化学部　国際文化学科１年次生）

今回一番学んだことは、情報管理の大切さです。センターにあるチラシの把握だけでなく、参加したボランティアの体験レポートを書くことも大事だなと思いました。瀬田ボラセンは学生スタッフが今まで経験したボランティアについて体験先はまとめられていますが詳しい内容は本人に聞くしか方法がなく、本当にその情報が知りたい時に知れない状態です。

確かに瀬田ボラセンは学生スタッフがたくさん在籍しており、そのすべてをレポートにしてまとめることは容易なことではないと思います。今回のセミナーでもそこまで話をつめられなかったので、今後考えるべき課題だなと思いました。また、やはり学生スタッフは気さくさが必要だということを学びました。どこの大学のボラセンのスタッフもみんな気さくに話しかけてくれ、このように相談に来てくれた学生に応対出来れば相談しやすいだろうなと感じました。やはり楽しそうに話を展開出来たら相手も信頼して思っていることを具体的に話してくれると思います。

セミナー名	学生団体合同マネジメント研修　ユースナレッジマーケット 「次のリーダーをどう育てるか？」～組織のコアスタッフに求められる9つの力！～
日　　時	2010年9月18日（土）～2010年9月19日（日）
場　　所	大阪市長居ユースホステル
主催団体	シチズンシップ共育企画
全体参加人数	学生団体や大学ボランティアセンターの現リーダー層と次期リーダー候補 5団体16名

■目　　的

本セミナーは、社会問題の解決に取り組む学生ボランティア団体の抱えるさまざまな課題を解決するための合同研修として実施されています。今回のテーマは、どんな学生団体にもやってくる「引き継ぎ」。組織を担うコアスタッフに求められる力と視点を整理しつつ、それぞれの組織の「引き継ぎ課題」を洗い出し、より活き活きとした組織になるための引継ぎプランを作成します。

■セミナー概要

【1日目】

①オープニング
②セッション1「わが組織について語る」
③セッション2「コアスタッフに求められる9の力」
④セッション3「わが組織の引き継ぎ課題を洗い出す」
⑤セッション4「引き継ぎプランをデザインする」
⑥オプショナルPG「情報交換会」

【2日目】

⑦プログラム開始・1日目のふりかえり
⑧セッション4「プランニング発表会」
⑨セッション5「現場に学びを持ち帰る」
⑩クロージング

■センターからの参加者と感想

【深草キャンパス】1名参加

横関　つかさ（法学部　政治学科3年次生）

今回のセミナーのタイトルからして、現役のリーダー層がメインに参加するものかと考えていましたが、プログラム的には次世代のリーダー候補が世代交代した後に実行するプラン作成がメインでした。そのため、現世代で単独で参加した私はプラン作成に積極的には参加せず、瀬田のプラン作成に参加する形になりました。そこで普段ではあまり見られない瀬田の幹部の動きや考えを知ることができ、深草との違いを発見したことは個人的には収穫であったと思います。また、予定外の参加でしたが、ファシリテーターの青木将幸さんとお話する機会があり、ファシリテーションの技法についてなどアドバイスを頂けたこともとても勉強になりました。セミナーの所々でスタッフ向けのワークをするときの参考になるようなこともあったので、ぜひセンターで取り入れていきたいと思います。

【瀬田キャンパス】2名参加

高田　靖人（社会学部　社会学科3年次生）

このセミナーでの龍谷大学ボランティア・NPO活動センターの「引き継ぎプラン」は、幹部と幹部以外の学生スタッフの「ボラセンへの想いを共有し、ギャップを無くす」ことを中心に考えました。セミナーを終えて、今、私が出来ること、伝えることを代表の期間を使ってフルに活かすべきだと思い、使命感に駆られました。

玉置 友圭子（国際文化学部 国際文化学科2年次生）

コアスタッフに求められる9つの力というレクチャーをうけて私が心に残っているものは、「団体の芯」というものでした。様々な種類の

芯を教えていただきましたが、私はメンバーの団体に対する想いの芯というのが一番心に残っています。毎日仲間と様々な活動を行っていますが、その仲間が、どうしてこの団体に所属しているのか、そのきっかけ、またこの団体をどうしていきたいのか、など仲間の想いの芯を知ることがとても大切だと学びました。振り返ってみると、私はこのような仲間の想いを全く知らないことに気付き、また自分の想いも伝えていないことに気付きました。とても根本的なことで全く気にせず過ごしてきましたが、この想いをみんなで共有出来たならば、ますます気持ちがひとつになるのだと思います。逆にこのような想いを全く知らないまま活動を続けてゆけば、自分のことも相手の事も理解し合えないし、いつかはみんながバラバラに向かっていってしまうと思います。とても基本的なことだけど想いの共有はとても大切で、基本的だからこそ当たり前のように流してしまわずしっかりと伝え合っていきたい、いかなければならないと学びました。

セミナー名	大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー 2011 理想のボラセンへの道　～私はリーダーとして○○できる！を考えよう～
日　　時	2011年２月13日（日）～ 2011年２月14日（月）
場　　所	宇多野ユースホステル
主催団体	特定非営利活動法人ユースビジョン 大学ボランティアセンターリソースセンター
全体参加人数	大学ボランティアセンター等で活動する学生スタッフで、2011年度の運営の中核を担うリーダー　合計15名（５大学・６キャンパス）

■目　　的

このセミナーでは、各ボランティアセンターの理想の姿に近づくために、「組織」と「個人」を振り返ります。また、各センターにおける「リーダーの役割」とは何かを自ら考え、４月からの新年度の運営計画づくりやスタッフのマネジメントスキルを学びます。

■セミナー概要

【１日目】

①開始・オリエンテーション
②アイスブレイク
③組織と個人を振り返る
～「VCの活動の目的とは」「リーダーとは」～
④リーダーが悩んでいることを皆に質問＆皆で答えを持ち寄ろう

【２日目】

①アクティビティ・写真撮影
②私たちのボラセンの2011年度をデザインするレクチャーとセンター別ワーク（※昼食時間含む）
③全体のまとめ・ふりかえり・わかちあい

■センターからの参加者と感想

【深草キャンパス】計４名参加

池上　眞平（法学部　法律学科２年次生）

他大学の学生スタッフとセンターの情報を交換し、一緒に課題について考えることによって、今後の運営について参考になりました。なかなか自分たちのなかでも何について悩んでいるのかがはっきりと見えてこず、他大学の学生スタッフに向けて問題を表現することで、自分たちが何をすればよいのかが明確になりました。研修前はスタッフのモチベーションの差につい

て、ただ単に問題意識だけをもっていましたが、それは無理やり合わせる必要は無く、全員に共通する目的・目標を全員に意識してもらう工夫が大切なのだと感じました。漠然と問題意識だけあったので、今回の研修は運営を行っていくために大変参考になり、また一緒に参加した学生スタッフと運営について話すことで、いつも以上にセンターのことを考えることができました。このメンバーだけで終わらせるのではなく、今回の研修で得たものを他のスタッフとも共有し、活気あるセンターにしていきたいです。

井筒　智隆（文学部　真宗学科２年次生）

どんな組織でも目標はある。その組織としてその目標を達成するために活動する一員であることを改めて学べた。それと同時に、メンバー間の温度差があるのは当たり前ということも学べた。一人ひとりモチベーションが違うのだから、無理に同じモチベーションにさせず、一人ひとりがどの様に活動に関わっていきたいのかを考え共有する。しかし、その時に学生スタッフとして最低限するべきこと、果たすべき役割を共有する大切さを改めて学べた。また、幹部だけが運営を考えるのではなく、幹部が困っている時に助ける必要性、幹部を一人ぼっちにしない大切さ、一般スタッフだから出来るフォローの大切さを改めて感じた。今回このセミナーに参加して、自分の立ち振る舞い方、活動の仕方、今後どのように企画を作るか等考えられとても良かった。そして何より、センターについてあまり話し合えなかったメンバーとも話し合えてとても良かった。

義岡　夢（短期大学部　社会福祉科１年次生）

私はこのセミナーで、メンバー間で温度差があるのは当たり前ということを学んだ。この温度差が各大学のボラセンカラーを出しているのだということに納得して、今まで悩んでいた温度差は大切なのだということを学んだ。また、話していると似ている悩みをどの大学も持っていることに気づいた。しかし、似ている悩みなのにどの大学も個性が違ってすごく新鮮で、楽しかった。そして、どの方も現在のボラセンを変えるために、一生懸命悩んで向き合っていることがひしひしと伝わってきて、多くの刺激をもらった。今回参加して、本当に良かった。

池内　亮太（法学部　法律学科２年次生）

仲間と問題点を共有することや講師によるクリニックによって解決策を導き出すことを生かさないと意味がないと感じた。目的、目標の重要さを再認識でき、リーダーについて考え、知ることができた。

赤澤さんの講義はとても勉強になり、今すぐに生かせることばかりで、しっかり復習し、リーダーセミナーに来ていないスタッフと共有することが大切だと感じている。４月までにスタッフとコミュニケーションをとり、ボラセンについてもっと深く知るべきだと感じた。自分のやろうとしていることをスタッフにちゃんと伝えないといけないと感じた。

自分たちの問題を、スタッフも同じように考え悩んでいると思うので、解決に向かうように日々励んでいきたい。

【瀬田キャンパス】計４名参加

歌藤　智弥（国際文化学部　国際文化学科２年次生）

セミナーの前は瀬田ボラセンを一方向からしか見ず、運営について行き詰まりを感じていた。しかし、セミナーで各ボラセンの課題を共有することで、自らのボラセンを客観視することができた。そのことによって、もう少し大きな視点でボラセンを見つめて、ボラセンは誰のための組織か、何を目的とすべきなのかという根本に立ち返って考えることが出来た。各大学の悩みや課題は、瀬田と比べると、とても大変で深刻なものがたくさんあった。しかし、その中でも他のボラセンの人々は行動的に見えた。「そう思うんやったら、やったらええやん。」と言われたのが印象に残った。僕たちは少し、頭でっかちになっていたのかなと感じるところもあった。今回得たことを、ただそれだけで終わらせることをしないで、しっかりとした行動に変え

ていきたい。

玉置 友圭子（国際文化学部 国際文化学科２年次生）

難しく考えずに、まずは「行動」ということを学びました。今までの活動の中である問題について悩んでも、深く考えすぎて、逆に何も行動出来ていなかったなあ、と気づきました。とても初歩的なことですが、悩んでも何も変わらない、まずは行動してみることが大切だと学びました。

私は今回でこの様なセミナーに参加するのは３回目でしたが、毎回参加すると必ず感じることがあります。それは、他大学のボランティアセンターのスタッフと交流することの大切さです。自分のボランティアセンターだけしか見ていないと見えないことがあります。それは自分のボランティアセンターの問題点であったり、改善策であったり様々ですが、それだけでなく、自分のセンターの良いところもたくさん発見できるのです。また、セミナーに参加すると必ず、モベーションが上がります。私は、このセミナーに参加して得たモチベーションと学びを消してしまわず、必ず自分のセンターに還元していきたいと思います。そして、もっと多くの学生にこのセミナーの素晴らしさを伝え、参加してもらいたいです。

深水　雅士（社会学部　地域福祉学科２年次生）

次の５点について学んだ。①「何のためにやるか？」「何をやるか？」が定まっていなければ、「どうやるか」（組織の体制・手法）まで導けない。②目標決定の時は一部の人間だけで決めるのではなく、全員で討議して決めなければならない。その討議に単にいるか（参加）どうかではなく、決定内容に自分の意見が入っているか納得しているか（参画）が活動意欲に影響するということの再確認。③企画の募集人数が少ないことの改善策としては、どの広報手段より口コミが一番強い。そして、あまり「ボランティア」ということを強調しすぎない。④「みんなが代表」のつもりでものを考えることができたらモチベーションは維持し向上していく。⑤スタッフがどう思っているのか分からなければ、聴く・聴きだすことでコミュニケーション不足改善にもなるし、聴きだす力はコーディネートでも活きてくる。

この２日間を通して、他大学との交流の楽しさと情報共有の重要さ、また客観視ということや自分の役割をしっかりと認識しなければならないということを参加者のみんなから教えてもらった。また今回のようなセミナーや他大学との交流会に参加したい。

吉田　裕貴（国際文化学部　国際文化学科１年次生）

まずは幹部がどうしたいのかを明確にし、みんなに話すことが大切だということ。また目的や目標を明確にすることの重要性も今回大事だと学んだ。リーダーが前でひっぱる意識を持ち過ぎるのはよくないと思い、今まで副代表の立場から誰かに何かを言ったことは無かったが、自分の意見も言わないまま、周りに意見を求めるのは確かにフェアではないと思った。また今回のセミナーで「メール１本よりビール１本」という言葉が一番心に残っている。メールだと本当に相手に伝わったのか分からないし、表情が見えない分相手が納得してくれているかも分からない。やりとりを早く円滑に進めるのは、やはり会って話をすることが一番効率がよいのだと再確認した。今回参加して自分達が悩んでいたことは本当にちっぽけなことだったと感じた。幹部だけが理想を追い求めていてはいけないなと思った。だから私はもっとみんなと深くボラセンの話が出来るようになりたい、もっと信頼を得られるように勉強したいと思った。